

~~~~~  
書評 しょひょう BOOKREVIEW 書評 しょひょう BOOKREVIEW  
~~~~~

いまの皇室典範論争はまったくの不毛
山崎闇齋から開始された崎門学が現代日本に蘇る

♪

坪内隆彦『GHQが恐れた崎門学』（展転社）

@@@@@@@@@@@@@@@@

いま、こういう正統な著作が世に問われるということが時代の変化。世論の激変を象徴していると言える。

想えばGHQが発禁図書として日本精神を鼓舞し、皇室伝統を尊ぶあらゆる思想書を日本人の目に触れさせないようにした。およそ七千余もの名著が日本の書庫から、書店から消えた。

完全に消滅してしまったと想われていた正気の書物は、時を経て、ちゃんと復活するものなのだ。

とりわけ忘却の彼方にあつたのは水戸学の源流とも言える「崎門学」派の人々。錚々たる学者、知識人、維新行動家の列伝ともなって、本書は思想書でありながら、一般啓蒙書でもある。本書を丹念に読めば、いま論じられている皇室典範議論など不毛の論争、基本を抑えない浅学なひとたちが侃々諤々したところで、結論もまた不毛であろう。そもそも国会議員風情が皇室典範を云々するとは歴史の錯誤である。

さて本書で坪内氏は、明治維新を導いた国体思想の系列を現代風に追求しつつ、国体の本義に迫る。中心に置かれるのは次の五冊である。

浅見綱齋『靖献遺言』

栗山潜鋒『保建大記』

山県大弼『柳子新論』

蒲生君平『山陵志』

頼 山陽『日本外史』

一般的に維新回天の思想的原点として扱われてきた藤田東湖、会沢正志齋らは、崎門学の中継を担った学者としての位置づけがなされ、源流は山崎闇齋、その系統から輩出した山鹿素行、そして国学としての本居宣長、平田篤胤、賀茂真淵らと流れるわけだから、ちよっと出だしの毛色が違う。

山崎闇齋の崎門学の源流は北畠親房にまで遡及する。

七生報国、君は君たらずとも臣は臣足らざるべからずという忠君思想は北畠親房がはじめて体系化した。北畠は茨城に引きこもって著作に専念した。神皇正統記である。数百年の歳月を経て、水戸学へ流れ込んだ。

浅見綱齋が著した『靖献遺言』は貞享四年（1687）に書かれ、後に『勤王の志士の聖典』と呼ばれる書物、義烈英雄らの列伝を中国の英傑にもとめて徳川政府を暗喩し、その影響を受けたひとりが梅田雲濱だった。

雲濱は小浜藩士だったが、国防強化を説いて藩主の怒りに触れ、版籍を剥奪された巢浪人。柳川星巖、頼三樹三郎らと交わり天下国家のために奔走し始める。やがて安政の大獄で捕縛され、獄死した。

西郷隆盛は雲濱の獄死に際して、

「いまに生きながらえていたら、我々は執鞭の徒に過ぎない」と慨嘆した。

栗山潜鋒という学者は水戸光圀『大日本史』の編纂に関わった。今日まであまり名前が知られなかった。

栗山潜鋒の著作『保建大記』とは後西天皇の御子、尚人親王のご学友となった栗山が、後白河天皇の踐祚から崩御までの38年間に皇室の衰微と武家の萌葱をもたらした戦国動乱の原因を遡及し考察したものだ。

長らく埋もれていたが、竹内式部が見だし、浅見の『靖献遺言』とともに講義テキストに使用して、志士の間で知られるようになったという。

ともかく維新前夜、草莽の志士らは、何を読んで何処に刺戟を受けて、国体明示のために立ち上がったのか。いのちをかけるほどの価値が、なぜそこにあるのかを、思想書を基軸に多くの志士の逸話をあつめて体系化した労作である。